

皇學館大学研究開発推進センター紀要 第三号
平成二十九年三月一日発行（抜刷）

講演

平成二十七年年度皇學館大学研究開発推進センター神道研究所公開学術講演会

（平成二十七年十一月十二日 於四号館 四三一教室）

中世に於ける公家衆の家名伝襲と家伝文書・家領の継承

橋 本 政 宣

平成二十七年皇學館大学研究開発推進センター神道研究所公開学術講演会

(平成二十七年十一月十二日 於四号館 四三一教室)

中世に於ける公家衆の家名伝襲と家伝文書・家領の継承

橋 本 政 宣

【佐野真人】 本日はお忙しい中を御参集いただきまして、誠にありがとうございます。只今から平成二十七年皇學館大学研究開発推進センター神道研究所公開学術講演会を開催させていただきます。開会にあたりまして、研究開発推進センター長の岡野友彦よりご挨拶並びに本日の講師の先生の御紹介をさせていただきます。岡野先生、宜しくお願い致します。

〔センター長挨拶・講師紹介〕

【岡野友彦】 只今ご紹介いただきました、研究開発推進センター長をつとめております岡野友彦と申します。研究開発推進センターには神道研究所、史料編纂所、神道博物館の三つの組織がございます。神道研究所では、毎年公開学術講演会と公開学術シンポジウムの二つを開催いたしております。今年の公開学術講演会には、東京大学名誉教授にして舟津神社宮司でいらっしゃいます橋本政宣先生をお迎えすることが出来ました。橋本先生、ありがとうございます。

橋本先生のご略歴を紹介をさせていただきます、ご挨拶に替えさせていただきますでしょうかと思います。橋本先生は昭和十八年福井県のお生まれです。舟津神社という古くからの社家にお生まれになりました。そして、神職とされるために國學院大學

へと進学されました。大変畏れ多い話ですが私の大先輩でございます。國學院大學大学院文学研究科日本史学専攻博士課程を中途退学しまして、昭和四十四年に東京大学史料編纂所にお入りになり、昭和五十七年に同助教授、そして平成五年に史料編纂所教授へと御昇進されました。平成十六年に東京大学を定年退官され、現在は東京大学名誉教授で舟津神社宮司のお立場でいらっしゃいます。先生のご専門は、近世神道史、そして朝廷史という分野でございます。私が学生の頃や、あるいは先生が史料編纂所にお入りになった頃は、近世を専攻する研究者は、幕藩体制といって、幕府や諸藩、あるいは農民、ちよつと氣の利いた人で町人の研究をするのが普通で、公家や神社の研究をするということになると、ちよつと変わった人だなと思われていました、私も中世の公家と家人領を研究しておりますので、そういう風にみなされがちの時代でした。今は全然違います。むしろそちらがトレンドのような感じですけども、昔は中世・近世で武士の事をやらないという少し変わり者だというような感じでした。そのような状況の中で、公家、あるいは神社の研究をずっと続け、しかも時流に流されないという、非常に緻密で実証的な研究をずっとやってこられた先生でいらっしゃいます。先生の

ご業績はたくさんありますので、今日は持ちきれなくて、本当にごく一部だけこちらに持ってまいりました。先生のご業績として忘れてはならないものに、神社史料研究会という研究会をお立ち上げになって、現在はその代表でございます。神社史料研究会は、研究会の雑誌といったものは出さずに本を出しているというところで、思文閣出版から『神主と神人の社会史』という、これが神社史料研究会叢書の第一冊でございますが、このような本を次々と御出しになっておられます。神社史料研究会には、私も本学の大学院生を連れて何度もお伺いさせていただいておりますが、國學院大學と皇學館大学という神社界を担うべき研究者が一堂に集まる非常に恵まれた環境を御調べいただいた先生です。そういう意味で私も大変感謝しておりますし、神社史料研究会には國學院・皇學館の学生だけでなく、神社史料として自分の家に伝わった貴重な史料をお持ちの現役の神職の方々も集まって研究会を一緒に行っています。これも大変ありがたい事だと考えております。

さて、神社の研究ともう一つ、先生のご業績として忘れてはならないのが公家社会の研究でございます。これも片手で持ちあがらないくらい重たいのですが、吉川弘文館から御出しになった『近世公家社会の研究』です。この御本で第一回徳川賞を受賞しておられます。それと、今日のお話の中心になるかと思いますが、近世の公家だけではなく、中世・近世を通じた公家全体のご研究に大変詳しく、吉川弘文館から『公家事典』という御本を出しておられます。これは、橋本政宣先生編と書いてありますが、実は橋本先生がほぼ一人で書きになったという著書でございます。こういう辞典は、普通は沢山の大学院生とかに割り振って書くというのが普通のスタイルですが、お一人で書きになったというのを聞いたとき、私は仰天しまして、大変な先生だなと思いました。最近のご業績としては、ご自分の御社であります舟津神社の歴史を書かれた『舟津神社本殿造営史』などをお書きになっておられます。ここに積み上げただけでも大変な多さなのです

が、その他多数のご業績をお持ちの先生で、神社史料研究会の代表ということで神道研究所の講演会に御呼び致しました。本日は「中世に於ける公家衆の家名伝襲と家伝文書・家領の継承」という大変興味深いお話をいただけるということで、私も大変わくわくいたしております。皆さんと一緒に聞かせていただきたいと思っています。それでは橋本先生、どうぞよろしく願います。

【橋本政宣】只今ご紹介に預かりました、橋本政宣でございます。いま程は、岡野先生から非常に過分なるご紹介をいただきまして、恐縮しております。私は、平成十六年に生家の福井県鯖江の舟津神社社家の家に戻るまで、長いあいだ東京大学史料編纂所に勤めておりました。

この史料編纂所は、「日本史に関する史料の研究、編纂及び出版」を目的に設置されている大学附置研究所であり、国内外の各種の史料を蒐集し、史料学的に研究の上、『大日本史料』をはじめとして『大日本古文書』『大日本古記録』『大日本近世史料』『大日本維新史料』『大日本関係海外史料』『花押かがみ』など、日本史研究のための根幹的史料集を編纂、出版してきています。私はそこに三十五年間勤めておりました。事業遂行のため多くの史料の蓄積があり、まさに宝の山に入ったような感じで勤め勉強してきました。

いまご紹介ありましたように、今日お話するのは、公家関係のお話です。実はいま話に出ました『公家事典』(吉川弘文館、平成二十二年)は、今から五年ほど前に吉川弘文館の創業一五〇周年記念で出した辞典でございますが、辞典を一人で書くというのは、私も最初から思っていないでした。もともとは、年ごとの公卿の人名録である『公卿補任』のデータベース化と、もう一つは各公家の人名辞典を出すつもりだったのです。ところが公家は官歴だけしかわからないことが多く、三条西実隆とか一条兼良などですと詳細なことが判り書けますが、多くの公家は殆ど官歴だけしかわかりません。それでは『公卿補任』だけで十分だとい

うことになってしまいました。そこで各家々の歴史的概要を中心とする事典をめざし、『国史大辞典』に掲載されている項目をもとに、多くの研究者に協力分担してもらったつもりでしたが、『国史大辞典』をベースにするにも種々問題があり、統一性こそが重要ではないかということになり、結局すべてを私が一人で執筆することになった次第です。

五摂家成立期の久安六年（一一五〇）から明治元年（一八六八）に至る、二百九十余家の公卿約三千人を家別に収録しました。総説、家名解説、系図、年ごとの官員録『公卿補任』を個人別の官歴に編集し直した詳細な履歴などで構成しました。記念出版ということで時間的余裕もなく、二年間で本当に大変な思いをして書きました。今日はその中でいくつか気付いたことをもとに、公家についての大体のお話と、それから公家の家を継承するというのはどういうことであつたのか、ということ等についてお話ししたいと思います。

レジュメは五枚ほどありますが、非常に細かい内容の史料ばかりです。ざっくりとした話が出来ればいいのですが、やはり細かいデータがないと判りにくいかと思いますので、説明をしながらのお話とさせていただきますと思います。

一、公家衆の家の継承

まず、公家という言葉ですが、これは本来天皇のことをいいます。それが一般的に廷臣のことをもいうようになりました。廷臣のことは公家衆というべきでありましょうが、ここでは一般的な云い方をしておきます。さて公家の家の数ですが、これは全部で一三八家あります。大体平安時代に公家の家の形が調ってききましたが、途中断絶してしまった家も沢山あります。またかなりの間中絶した家などもあり、それらを含め明治以前の段階、つまり幕末まで遣つた家は一三八家ということになります。そのうち江戸時代以前から続いている家を旧家といい、こ

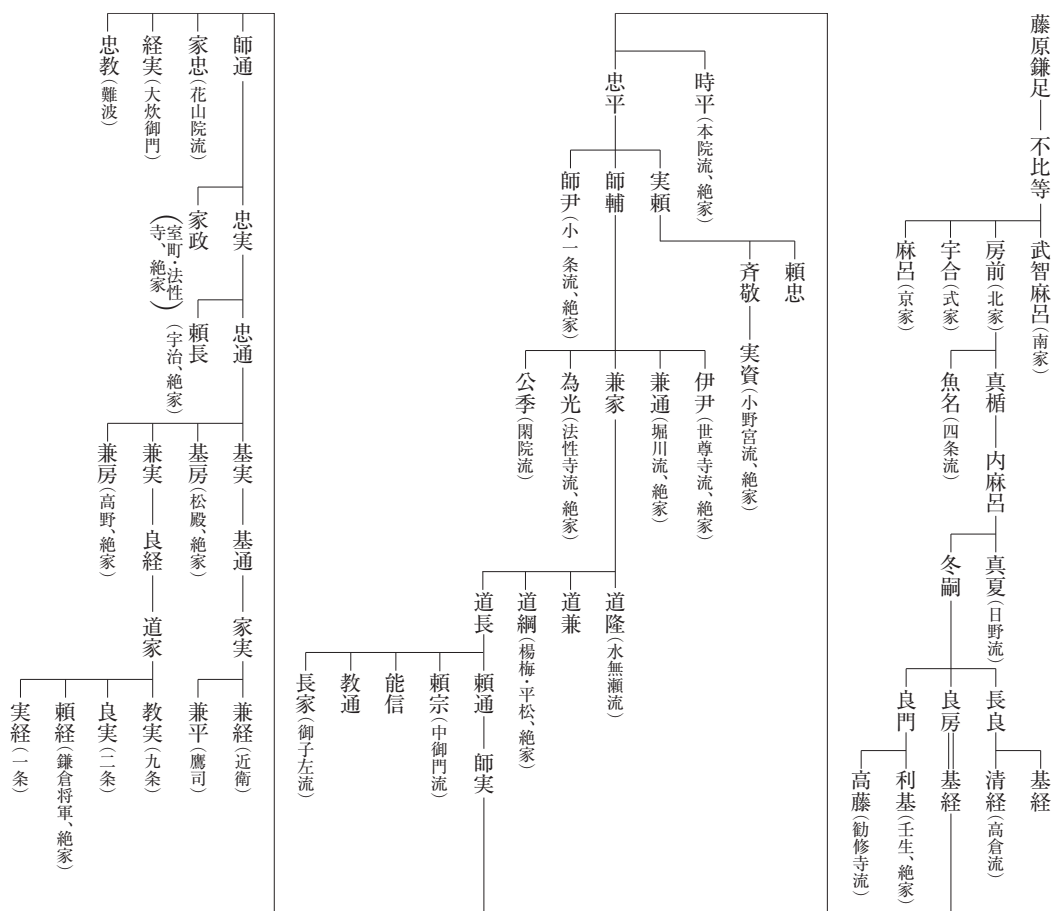
れが六十六家あります。これに対し、近世に新しく興つた家、すなわち文禄年間から江戸時代の中頃までに創立した新家が七十二家であります。

「公家」というと、皆さんはどういうイメージをもたれるでしょうか。よくテレビや映画などで公家というと、何か底意地の悪いような感じの人物として扱われることが多いようですが、それは公家に対する全くの無知・偏見ではないかと思ひます。

公家というのは、多くが古代から家名を継承してきた家で、各家が自分の家の家業、家職というものを持つていて、和歌や書道はいずれも堪能でありましたし、家によつては、儒学や蹴鞠、音楽などに秀でた家などもありました。例えば、西園寺家は琵琶が得意な家であり、花山院家は笙の家という具合です。あるいは何家はどの分野に優れているなど、それぞれが種々の分野に熟練の家、個々には学者であり芸術家というべきもののなのです。公家は宮中の儀式・古典・音楽、あるいは芸能・和歌など一応のことは習熟し、家業には堪能でなくてはならなかったものであり、このようにして家を存続してきたわけであります。

公家のうち、最も格式の高い家に摂関家（摂家）があります。これは摂政や関白にまでなることができる家で、藤原氏の嫡流です。近衛・九条・二条・一条・鷹司の五家があります。それから太政大臣にまでなれる家があります。これは清華家といい、西園寺家・三条家・徳大寺家など、都合九家があります。それから右大臣まで上ることができる家を大臣家といいます。これが三条西家など三家あります。以上が上層の公家衆。他に近衛官など武官として昇進する家を羽林家といいます。文筆を主とする家を名家といいます。これら全てを含めて一二一家あるわけです。上層部の公家は一七家、全部で一三八家ということです。

図一は藤原氏の略系図です。摂家流は藤原鎌足を祖とする家で、鎌足の子の不



図一は藤原氏の略系図です。摂家流は藤原鎌足を祖とする家で、鎌足の子の不比等の後は四家に分かれ、藤原房前が藤原氏の北家の祖といわれます。そして藤原北家がいくつかの家に分かれていきます。例えば、房前の子の魚名は四条流を興し、その四条流は七家あります。房前の孫内麻呂の子真夏は日野流を興し、この流れには名家の十二家があります。これに並ぶ名家の大きな流れに、今日のお話のなかで大きく取掲げる勸修寺流があります。すなわち、甘露寺・葉室・勸修寺・万里小路・清閑寺・中御門・坊城の七家、新家に芝山・岡崎・池尻・梅小路・堤・穂波の六家、都合十三家があります。それから高倉流や水無瀬流などという家の系統がいくつか興り、この藤原北家が実質的に公家の中心をなします。他に公家には皇族から分かれた源氏や平氏等がありますが、中心となるのはやはり藤原氏です。摂家流・四条流という言い方が家の流派といわれます。しかし古代からの家がそのまま続いてきたわけではなくて、家が続けるということは大変なこととで、断絶・中絶した家が実はたくさんあるのです。

近現代ならば家の相続をするときに、嗣子がいないときには娘に婿を取ったりあるいは血縁等から養子にしたりとかするでしょうが、公家の家は伝統的な家名を相続するということが重要なことであり、余命少ない段階になっても養嗣子などを急ぎ決めるようなことをしなかったようです。家の継承をきちんとできるような人を探すということが必要なことで、自分が死ぬ前に決めておくなどということはあまり考えていなかったように思われます。また他姓の人を養子にすることはなく、藤原氏が源氏や平氏から養子をとるということはありえないことでした。出来うれば同じ流派の人の中で、本当に家を託すということが出来る人を探し相続させてきたのです。例えば、種々の状況があつたではありましようが、鷹司家では、戦国時代より織豊期にかけて二十八年間も当主がいらないという時期がありました。摂関家でもそのようなことがありましたし、他にも十年以上中絶したような家は、旧家六十六家の内で実に二十三家もあるのです。清華家のトツ

プである三条家は、戦国時代に二十四年間の中絶の時期がありました。また今出川家は室町初期に十四年間で中絶し、難波家などは南北朝に一度家が滅び、江戸時代になってようやく再興されるということがあり、実に二百数十年間の空白がありました。姉小路という家も室町初期に断絶して、二百数十年を経た慶長十八年（一六一三）に再興されました。

また、史上に名をなした家でありましたが、断絶してしまった家もあります。閑院流の嫡流となる西園寺家と比肩するほどの名家であった家に、洞院家というのがありました。この家は、公家や武家の系図をまとめた『尊卑分脈』を編纂した洞院公定を出した家で、途中で断絶してしまっているのです。それから水無瀬家というのは、水無瀬神宮の社家として今に継承されているけれども、その本家であったのは坊門家というのです。坊門家も途中で無くなってしまいます。このようなことから、家を相続するということは並大抵のことではなかったことがお判りいただけるかと思います。

先ほどから家の継承と言っていますが、家の名前、つまり「家名」というのは、古くから公家の家としての名前があったのかというと、実はそうではないのです。例えば、九条家の最初の人、「九条兼実」という名前は有名ですけど、「九条家」というのは屋敷が「九条」にあったからの呼称で、兼実は九条第にも一時は住みますが、実質的には別の家、妻君の第である一条室町第に住んでいました。要するに九条兼実というが、実質的には九条の家名が興るのは随分後のことなのです。それから名家に廣橋家というのがあります。これは「廣橋」という名で通っていますが、実は古くは「勘解由小路」といいました。廣橋という家名が興ってくるのが凡そ室町期ころのことなのです。例の近衛・九条・二条・一条・鷹司という五摂家も、藤原家本流が五つに分かれたことに端を発するのですが、近衛・九条とかいう家名が定着するのは、凡そ鎌倉時代の中期的ことです。

では、それまではどう言っていたのかというと、第（邸）号で呼んでいました。

一条に住んでいたから、「一条の大納言さん」とか、或いは「九条の誰々さん」というように呼び、どこに住んでいたかということで、第号がついていました。実際にはどのようなようになっていたかを具体的に述べると、一般に結婚のことは「嫁取り」と言われますが、これはずっと後になってのことで、鎌倉中期以降、場合によっては室町期頃にならないとそういうことにはなりません。古くは「妻問婚」といい、男性が女性の所へ訪ねて行って、そこで居住するのが古い段階の結婚の在り方でありました。そして、そういう「妻問婚」から次第に平安中期頃になってくると、「招婿婚」や「婿取婚」といって、男性を呼んでそこに住ませるという形態になりました。招婿婚は高群逸枝という女性史家により新たな研究がなされ、それは『招婿婚の研究』（大日本雄弁会講談社、昭和二十八年）の大作として纏められています。概括的にいえば、男性は女性の所へ通っていき、女性はあるべき男性ということであればそれを受け入れる。そうするとその女性の親はそれを認め、居住する家も生活も全部提供するのです。そのように男性が女性の家へ行って、その邸宅のある地名をとり何々の誰々ということですから、親子でも父と息子は家の号が違うことにもなるのです。それが次第に嫁取婚になってくると、全部自分の家に女性を迎え入れるということになり、それが「家名」になってくるわけです。それまでは「家号」なのです。その早い例が、五摂家の近衛・九条・二条・一条・鷹司であり、大体鎌倉中期頃から家名が定着していくと考えておいたら宜しかろうかと思っています。

二、公家衆の家格と官位

公家の家というのは、平安時代の中頃から次第に家の格が定着していきます。官位の昇進の次第によって、どこまで昇進できるかということが大体決まってきた、近世にはこれが完全に定着します。例えば摂家では、大体五、六歳で元服し

て、叙爵して左近衛権少将になる。叙爵というのは五位になることをいいますが、摂家の場合であれば正五位下、一般には従五位下です。次いで五位から越階といつて段階を飛んで従四位上、左近衛権中将になります。それからいきなり従三位になります。三位中将というのがこれです。従三位になるのを上階といいます。公卿というのは位階は従三位以上、官職は参議以上をいいます。それより下を平公家といいます。その上は参議、権中納言、権大納言を歴任し、それから任槐といつて、内大臣、右大臣、左大臣というようになります。摂家の場合は、参議は飛ばしいきなり権中納言になります。中納言・大納言などはすべて権官です。正官は正中納言というのがありますが、大納言、少将・中将も全て権官なのです。権中納言になり権中将を兼ねる。その次は権大納言となり近衛大将を兼ねる。それから更に内大臣や右大臣、左大臣となり、左大将を兼ねたまま昇進、最終的には従一位太政大臣、あるいは摂政だとか関白になる。これが摂家の官位昇進の次第なのです。

次に、清華家というのは、先にも言いましたように太政大臣にまでなれる家で、閑院流・花山院流・久我流の三家流、九家あります。これはやはり参議を経ずに権中納言になり、太政大臣まで昇ることができる家です。その次に大臣家というのがあります。多く権中将から参議になり、宰相中将となって、最終的には権中納言、権大納言、右大臣にまで昇ることができる家で、中院・正親町三条・三条西の三家が大臣家です。そこまでが上層の公家衆になります。それに対して、中・下流の公家衆である平公家には、羽林家・名家というのがあります。羽林家は、近衛少将・中将を経て、参議、権中納言、権大納言にまで昇る家で、閑院流・花山院流・中御門流・御子左流・四条流・水無瀬流などの家々です。旧家で二十一家、新家で四十家あります。その下に名家というのがあります。文筆を主とする家で、宮中の文筆に関しては全てこの名家が関係します。これは弁官という役職を経て蔵人を兼ね、そして権大納言まで昇進できる家です。これには日野流、勧

修寺流、平家の西洞院流など、旧家で十三家、新家が十六家あります。それに、羽林家と名家と半々の性格をもった家に半家というのがあります。官位の昇進は羽林家あるいは名家に准じて昇進し、中・少将や弁官を経ないで参議、納言に進むが、他の家格の場合以上に遅速・先途などに大きな格差がありました。紀伝道、明経道、神祇道、陰陽道などの特殊な家業にたずさわった家々です。

これら官位の昇進、位階や官職の昇進は、申請によるものでした。昇進を望む者が旧例に従い申請し、摂家による「官位勅問」など諸吟味の手続きを経て勅許されました。官位申請は、「小折紙(申文)」に「例書」を添えて差出しました。公家の場合には家格によつて官位の昇進の方向・速度が決まっていましたから、その家の旧例に添つて年齢・中置により、官職については欠員の具合を勘案しながら、小折紙を職事に差出し、内覧を経て披露されました。旧例にもいくつかの段階があつて、自家の先例である「家例」、同等の人の例を借りる「勘例」、一等上の所の例を借りる「傍例」があり、競望の場合は、家例、勘例、傍例の順で選考の参考にされました。申請の間隔にいう中置は、例えば中置二年とは、三年目に昇格の申文を提出できるということであり、三年目に

また、公家には勤むべき励むべきいくつかのことがあります。官職位階に應じ朝廷の公事儀式を勤めること、これがもっとも重要なことであり、そのためには学問に励み、家に相伝される職務・技能、いわゆる家職(家業)を継承し奉仕することが大切なことでありました。先にもお話ししたように、例えば西園寺家では琵琶を先祖からずっと伝えていきます。三条家や徳大寺家は笛の名手であればなりません。滋野井家ですと神楽を伝承する義務があります。正親町家ですと琴、飛鳥井家や難波家だと蹴鞠、このように家芸・家職というのを皆持っています。それから摂家になると、御即位のときには摂家ならではの務めがありました。明治以降だと大嘗祭が中心になっているけれども、前近代は仏教儀礼の「即位灌頂」というのがあり、即位のとき高御座に即かれるとき、どのような所作を

し文言を発せられるかを、内々に伝授申し上げるのが摂家の役割でもありました。

さらに、禁裏小番を勤めることも、公家として欠くべからざることでありました。禁裏小番は、摂家を除く総ての公家衆が、番編成のもとに禁裏・仙洞御所などに日勤・宿直するものです。これに類することは早くから存在したのであります。これを小番と称し、具体的な実態が知られるようになるのは、室町時代以降のことです。早い事例として、永享二年（一四三〇）四月の「禁裏小番条々」が『薩戒記』に見えます。江戸時代の禁裏小番は、寛文三年（一六六三）に近習番が設置されるまでは、中世後期に引続き内々番と外様番の二番編成でありました。内々番を勤めるのを内々の家、外様番を勤めるのを外様の家と称しました。天皇の居所近くの内々において小番するのが内々番、一定の場所より内々には立入れなかったのが外様番でありました。

三、家伝文書と家領の継承

では、どのような形で公家の家は継承されたのか、という問題について、配布資料に挙げましたように、九条家と勧修寺の場合を中心に、詳しく見ていきたいと思ひます。

まず、九条家です。九条家は、法性寺関白忠通の三男の月輪摂政兼実を家祖とし、九条の称は、九条第に由来します。これは、もと藤原民部卿宗通の別第で、宗通女宗子と婚した藤原忠通の本第となり、さらにその女聖子（皇嘉門院、崇徳天皇中宮）に伝領されました。兼実は、聖子の異母弟で、その養子となり、九条第の南殿に侍住して九条と号したのです。但し、兼実以後の数代はそれぞれの本第を以って号し、九条の称が固定した家名となるのは、建長二年（一二五〇）に三代道家が「九条富小路亭」を孫の忠家に処分し、以後歴代相承け本第とするようになってからのことです。（図二、九条家略系図参照）

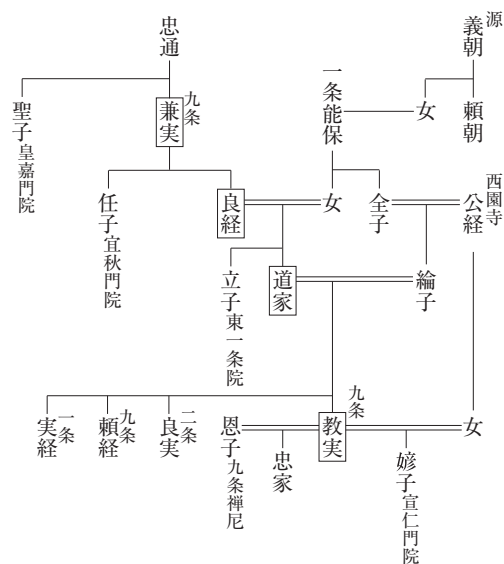
九条家領は、聖子が伝領したものが中心となっています。平安時代末、摂関家領をほぼ惣領した法性寺殿（忠通）は、その大部分を長子の基実に譲り、一部を聖子に譲ったのですが、前者の高陽門院（藤原泰子、藤原忠実女）領及び京極殿（藤原師実）領を中心とする家領百五十カ所が近衛家領、後者の皇嘉門院（藤原聖子）領約五十カ所が兼実に伝領され九条家領となるのです。兼実が聖子の養子となつたのは所領の伝領のためでしょうが、さらにそれをより確実なものとするためでもあります。仁安二年（一一六七）良通が兼実の第一子として生まれると、良通もまた聖子の養子となります。聖子はその没する前年の治承四年（一一八〇）五月十一日の日付で惣処分状を認めています（『平安遺文』三九二三号）。最勝金剛院領十一ヶ所、九条領三十五カ所、近江国寄人、和泉・摂津・近江三国の大番舍人等であり、皇嘉門院領の大部分が良通分です。兼実存命中は兼実がその沙汰をし、後には良通が知行すべしというものでしたが、良通は父に先達つて文治四年（一一八八）二十二歳の若さで頓死したので、兼実が知行するところとなったわけです。兼実のはち太政大臣、摂政、関白に歴任するが、いわゆる建久七年（一一九六）十一月の政変により関白職を追われ、五十四歳のときの建仁二年（一二〇二）正月出家して円証と号した。その二年後、元久元年（一二〇四）四月二十三日付で惣処分状を認めている（『圖書寮叢刊 九条家文書』一一一号、『鎌倉遺文』一四四八号）。皇嘉門院領に新収分若干を含むもので、処分の対象は、主として宜秋門院（藤原任子、後鳥羽天皇中宮、兼実女）。これは最勝金剛院領・同末寺領十カ所、九条堂ならびに家地の九条御所、女院庁分領三十六カ所その他であり、宜秋門院の没後は兼実の順孫道家に譲渡するよう定めている。いわゆる一期規定であり、摂家において明確な一期規定がなされた初見とされています。すなわち、

（一）「右、堂舎家地庄園等、永所奉附属宜秋門院也」、（二）「抑女院御万歳之後、可讓賜順孫道家之由、所申置也」、（三）「道家若殊非其器量、又短命早世者、被仰合摂政、可被相伝可継家之仁也」、（四）「又摂政若奉後 女院者、摂政領知之後、

可伝道家」、(5)「女院若令後摂政給者、直可被相伝道家也」とあります。(1)は宜秋門院に附属させるが、(2)女院が亡くなった後は順孫の道家に伝えられることを申置き、(3)道家がもし器量その人にあらざるとき、また短命にして早世することがあれば、摂政良経と相談して然るべき相伝者を定めらるべきとする。(4)また女院が先に他界されたときは、摂政が相続の上、道家に伝うべきこととし、(5)もし摂政が先に亡くなって女院が残られたならば、直接に道家に伝えらるべきとする。女院・良経・道家の間の関係と順序とがありうべき場合を想定して以上の如く定めているのです。そしてつまるところは(5)の場合が事実となったのです。それにしても、兼実は順孫の道家に全ての望みをかけながらも、若し家を継ぐべき器量に非ざれば、継ぐべき仁に相伝せらるべきであるとしていることは、家領を伝領させることは全て処分者の権限であり、その対象は子女・年齢の長幼というのではなく、器量そのものが枢要なことであつたということです。

良経は摂政当職中の元久三年(一二〇八)三月、父に先立ち三十八歳で頓死し、その翌建永二年(一二〇七)四月兼実は五十九歳で没しました。家を嗣いだ道家は時に十五歳、従二位権中納言でありました。翌承元元年(一二〇八)、当時朝幕間で大きな力を有していた西園寺権大納言公経の女倫子と婚し、一条室町第(東殿)に婚住し、同(西殿)に住した公経の後見を得て順調に出世を遂げ、建暦二年(一二二二)二十歳で任槐し、承久三年(一二三二)四月姉の立子(順徳天皇中宮)所生の仲恭天皇踐祚により、摂政となりました。しかし間もなく起こった承久の乱により、同七月鎌倉幕府の沙汰により天皇は譲位し(九条廃帝)、道家も摂政を罷免されます。三男の頼経が征夷大將軍となった頃から再び政界に復帰し、安貞二年(一二三二)関白となり、寛喜三年(一二三三)長子教実(これを譲るがその後も大殿として実権を握り、貞永二年(一二三二)女の嬪子(後堀河天皇中宮)所生の四条天皇の踐祚によりその外祖父としてまた権勢をも振うに至りました。

図二、九条家略系図



文暦二年(一二三五)教実が父に先立ち二十六歳で病死したので、希代の例であるが摂政に還任し、嘉禎三年(一二三七)には女婿の左大臣近衛兼経に摂政を譲り、翌四年四月出家します。法名は行恵。しかし依然として権勢を振り続けましたが、四条天皇が仁治三年(一二四二)俄かに崩御したことは大きな痛手となったのみならず、その後幕府の不信を蒙り、更にはかねてから不和であった二男の左大臣二条良実が関白の詔をうけたことにより、父子不和を深めていくこととなります。その後は一時関東申次となり、公武の枢要な地位につきますが、建長三年(一二五二)將軍頼朝の周辺に起こった陰謀事件に道家も関わっているとの疑惑をうけ、四年二月不遇のなかに東山の峰殿において六十歳で没するのです。その前々年の二月十一日、九条家領家地等の処分を行っています。史料一「九条道家初度惣処分状」といわれるもので(『圖書寮叢刊 九条家文書』一、五号(一))、家領は百五十二カ所、処分の対象は、寺院を除くと、(1)「宣仁門院」(彦子、教実女)、(2)「近衛北政所」(仁子、道家女)、(3)「九条禅尼」(恩子、九条忠家生母)、(4)「尚侍殿」(姪子、道家女)、(5)「前摂政」(一条実経)、(6)「右大臣」(九条忠実)、(7)「姫君」(粟生姫君)の七人、(3)は一期の後には九条忠家の子息に、(4)は一期の後是一条実経の子息に譲るよう定めています。中心をなすのは、(5)および(6)であり、その部分を次に掲げ、具体的に検討することにしたいと思います。

(前略)

家地

一条室町亭

円明寺山荘 在別所二箇所、

家領

女院方

山城国久世庄 最勝金剛院領、
(中略) ○四十八力所、

右、件家地、家領附屬如件、以年貢上分有充置仏事等、更不可有懈怠、或有相伝寄進地、無殊咎者不可被改易、但偏年貢懈怠過法、忽緒下知者、非其限、自關東伝領地、當時預所皆是給恩也、於勤厚之輩者、可有抽賞、於有不法懈怠者、早可被改易所帶、更莫違越、抑子孫中、不經大位、混凡庶之時者、不可相伝、可附家長者、但於前関白子孫者、縱雖有其仁、莫交此家領、女院方領并關東領之外、非沙汰限、可在意、佐々木領、又以勿論、

右大臣（九条忠家）

家地

九条富小路亭

家領

女院方

山城国東九条（中略）○三十五か所

右、件家地・家領附屬如件、以年貢上分有充置仏事等、更不可有懈怠、（中略）

中世に於ける公家衆の家名伝襲と家伝文書・家領の継承（橋本

抑子孫中、不經大位、混凡庶之時者、不可相伝、可附家長者、但於前関白子孫者、縱雖有其仁、莫交此家領、（下略）

○「姫君」分

以前条々、所注置如右、但先年受重病時、楚忽令書処分、未加再治、自然送

數年、爰前（二条良実）関白有不慮事、大略如違背、向後之進退、推而可量、家門之弧害、

子孫之障難不可疑殆、仍所改直先度之處分也、偏守此狀不可違犯、於彼狀者、

破却投火中既畢、倩思先規、清慎公家領・文書、三条閨白不伝之、順孫実資

傳之、法興院殿領、中関白・栗田関白不伝之、御堂多伝領之、法性寺殿御領、

六条摂政一向伝領之、菩提院入道不伝之、故禅闍以皇嘉門院御讓、次第相伝、

今以之思之、洞院摂政者家嫡也、（九条教実）右府既為嫡孫、（九条忠家）前摂政亦為寵愛器量、（一条実経）尤足

傳領之仁、仍所分与也、何況前関白於有不義哉、兼又宣仁門院・田中禅尼・(藤原彦子、教美女)
(恩子、忠家生母)

尚侍殿、所讓与庄々、一期之後可為次第附属、子細委載于右、於撰政^并右府

子孫、遂前途、為家長者相伝領掌勿論、若不登大位、混俗塵者、專不足其仁

歟、早返付家長者、可令物領、但於別相伝之地者、非其限、日記・文書子細

又同前、小僧万歳後、若成妨碍者、專不可為子孫、永可謂不孝、若我生九品

之淨刹者、以天眼照見、可加冥罰、若雖廻三有之故鄉、以肉眼照見、可与治

罰者也、抑此家領内、自關東有伝領地、附屬子孫、尤可請彼處分歟、仍所請

証判也、先規不可求於外、鎌倉故右大將賴朝卿、以没官領廿箇所、伝与姉（源）

妹二位入道能保卿妻室、其後申下
宣旨、附属諸子、高能卿并嫡女小僧母儀

華山院右府室・故西園寺入道室伝領、于今知行、入道大納言以彼因縁下向関

東、繼其跡、件庄々、或尼二品^(平政子)・義時朝臣^(北条)・泰時朝臣等^(北条)、相計所志与也、何

可有窄籠哉、近則故太（九条兼美）政入道、同有関東伝領庄々、悉以処分諸子、尤足准

拋歟、為後鑒粗勒子細而已、

予依手振、佷他筆、守此狀、努力々々不可違犯、

建長二年十一月 日

愚老

（九条道家）

（花押）

前摂政実経には、家地として一条室町亭、家領としては宜秋門院より伝領の山城国久世荘以下の所領二十一カ所、新御領の大和国河北荘以下の十七カ所、その他六カ所、都合四十四カ所を譲ること、年貢上分を以って仏事等に充置き、更に懈怠なきこと、相伝の寄進地や関東よりの伝領の対処の在り様などを示すとともに、次の二点について明記していることに注目しておきたい。一つは、子孫中において大位を経ず凡庶に混ざるのとき、つまり高い官位に昇らず一般的な官位にとどまるのであれば、相伝してはならない、家長者に付すべきであること。いま一つは、次男良実の子孫に関してで、たとえこの子孫に然るべき人があっても、女院方・関東より伝領以外のものとはかくとして、家領に関わらせてはならない、ということであります。

次いで、右大臣忠家には、家地として九条富小路亭、家領としては宜秋門院より伝領の山城国東九条以下の所領十五カ所、新御領の和泉国日根庄以下の九カ所、その他四カ所、都合二十八カ所を譲ることが記されています。年貢上分を以って仏事等充置き、更に懈怠あるべからず以下の記載は、前摂政に対するものと同文である。邸宅に因み、実経が一条、忠家が九条を家名とすることになる。なお二男良実は義絶排除され、処分状の対象からも外されているが、二条押小路に婚住し、二条を号したので、ここに九条家は九条・二条・一条の三家に分流するのであります。

この二人への処分については、洞院摂政教実の家嫡で右府忠家は既に嫡孫であり、前摂政実経はまた寵愛し器量の者であり、伝領するに足る仁であるとして、忠家は嫡孫によるとしか記されていないが、実経は鍾愛すべき一子であり器量も優れているとしていて、実経が格別の存在であったことが知られます。また処分後の扱いについては、それぞれにも記し、更に末尾にも記し念を入れているのは、高い官位に至らず凡庶に混る如き者には相伝してはならない、家長者に返付し惣領させるべきであるとし、また前関白良実の子孫は縦い撰録に登る者が出

ようと、この家領からの処分はさせてはならないとの条件でありました。清慎公以下の事例を列挙しているのも、処分するもしないも古くから例のあることであることを示すものであったといえます。また、注目しておかなければならないのは、日記・文書の相伝も、家地・家領と同様である、としていることでもあります。最後には、この処分状は絶対を守るべきものとし、違背することがあれば天罰、治罰をも加える、というところに、道家の遺志の凄みをあらわしています。それから、光明峯寺摂政道家は、没する二日前、建長四年二月十九日付で二度処分状を認めています(『圖書寮叢刊 九条家文書』一、九号(2))。

史料二、九条道家二度処分状案

光明峯寺

(中略)

右当寺者、小僧可終老地也、具載縁起々請、不遑重注、已上寺院者、為家之長者人可令管領、仍當時可為前摂政沙汰、其次右大臣可沙汰之、各專興隆之志可勵修造之営、以此兩人為家之棟梁、以彼子孫可令継予家之故也、但不經大位、令混凡俗人者、非沙汰之限、抑前関白依不慮子細、違背年久、更不可為子孫、永不可交吾家、条々不孝具記之、

(中略)

右、附属如件、委細載各々讓状、不可令違失、
(二五二)
建長四年二月十九日
沙門行惠判

自らの終焉の地とすべく建てた光明峯寺の管領のことを記したものです。「家之長者」たるべき人に管領させるものとし、当時は前摂政実経が、その次は右大臣忠家が沙汰すべきであるとする。この兩人を以って「家之棟梁」とし、その子孫を以って予の家を継がすべき故であるとする。そして、「大位」云々の記載と

前関白良実の家の排除を改めて記している。家の長者、家の棟梁は、前者が一門の上首、官位の上首、後者は当主をいうのであろう。この管領のことは九条一流に附属した四カ寺院（報恩院・光明峯寺・東福寺・普門院）に及ぶものでもあろう。このとき家長者であった実経は弘安七年（二二八四）七月没したとき、子息の一条家経は前関白前左大臣、九条忠教は右大臣であったから、家経が家長者となつたに相違ないが、家長者が没したときその子息が家長者であるとは限らないものであったから、紛争が起る要素を当初から含んでいた。『桃華蘂葉』の「一、家内管領寺院事」の普門寺の条に見える如く、応永七年（二四〇〇）六月後芬陀利華院関白（一条経通）と後報恩院関白（九条経教）とがその管領権を争うということも起こっている。

右のことは寺院の管領のことであるが、家地・家領の処分について、道家は嫡孫である忠家に対してではなく、「寵愛器量」の実経へより多くを譲与し、「日記・文書」も格別の譲与をしていることについて、改めて注目しておきたい。『尊卑分脈』の一条家祖家経の頃に、「当門三流内、以一条殿流、為嫡家、」との注記がある。全体的に書継ぎ増補された部分も多いとされる系図集でもあり、この記載がどの段階に注されたかについては問題もあるが、室町中期、一条兼良の子大乗院尋尊書写になる『撰家系図』（東京大学史料編纂所蔵）にも、「実経は父道家の愛子で、撰家数代の記録類を与えられた、そして嫡家として勅諡があつた」と記されている。実経が嫡家として扱われものであることは疑いなく、このころであろう。そのことを明らかに示すのは、公家の家にとって最も重要なものであつたはずの、九条兼実以下の自筆日記が一条家に伝襲されていることでありましょう。

先にも引用した『桃華蘂葉』は、「本朝五百年以来此殿程之才人不可有御座、」（『長興宿祢記』）と評された一条兼良が、撰家当主の心得を嗣子冬良に書き与えたもので、その中に次の如く見える。

史料三、二条家相伝日記正記事（『桃華蘂葉』）

当家相伝正記事

玉葉 八合 月輪禪閣自筆御記兼実初写本也、二条家相伝写本号玉海、

殿御記 一合 後京極撰政自筆御記良経

玉蘂 七合 光明峯寺禪閣自筆記道家

以上三代記真本、円明寺殿為三家嫡流相伝給者也、実経

口筆 五合 円明寺殿御記実経 仰人、多被書之、故名為口筆也、

愚曆 五合 後光明峯寺撰政御記家経

玉英 一合 後芬陀利華院関白御記経通

荒曆 六合 故殿御記経通

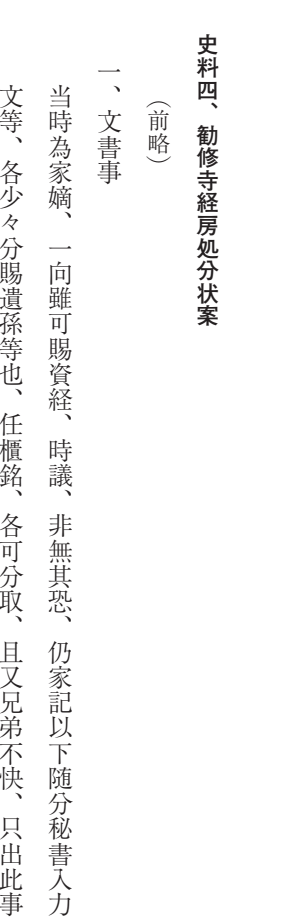
此外、棲心院殿・芬陀利華院殿御記等一合在之、於一条文庫紛失了、

兼良は応仁の乱が勃発した翌年の応仁二年（二四六七）五月、その子興福寺大乗院門跡の尋尊を頼って現任関白のままで奈良に疎開し、「一条家文書」六十二合を門跡の許に預けた。このことは『大乘院寺社雜事記』応仁二年閏十月二十四日条に見えるところで、『桃華蘂葉』に記す『玉葉』から『荒曆』までの記載、合数ともに合致し、他に二十九合を預けたことも知られる。いまこれらの日記の正本は明らかでなく、宮内庁書陵部所蔵の九条家伝来の『玉葉』は古写本である。以上により、家地・家領とともに、日記・文書というものが処分の重要な要素であつたことがよく知られるでしょう。

同じことは、勸修寺家についてもいうことができます。勸修寺家の家領、処分状などについては、すでに中村直勝先生の研究もあります（『勸修寺家領に就いて』『中村直勝著作集』第四巻）。関連史料として史料四／八を掲げておきました。勸修寺流は藤原氏北家の一流で、撰家流の祖関院大臣冬嗣六男太政大臣藤原良門二男の小一条内大臣高藤を始祖とします。勸修寺の称号は、勸修寺流の結合の中心である氏寺、山科勸修寺に由来します。図三の系図で知られるように、高藤の八世

隆方の『但記』、為房の『大府記』、為隆の『永昌記』、経長の『吉記』、資経の『自暦記』、経長の『続吉記』など多くの名記を伝えていきますし、歴代の遺書・処分状写などもよく伝存しています。勸修寺家に伝来の『勸修寺家累祖御遺言支證』や『御遺言条々』という記録は、勸修寺流の家領や日記・文書などがどのようにに

二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。



— 12 —

以下に処分したもので、これはその最後の部分。処分状の奥に従五位上参川守藤原朝臣として連署しているのは、すなわち資経である。資経は実は経房の孫で、実父の定経が正治元年十一月十九日菩提心を起こして出家したので、経房はこの定経を義絶し、孫の資経を以って嗣子となし、ここに家領等の処分を決定し、間もなく自分も出家するのです。「文書事」と記すところは、家嫡となす上は全てを資経に与えるべきであるが、考えるところがあつて、「家記」以下秘書や重要文書など少々は遺孫等に分与することにするので、櫃に記すところに従い各が分け取るべきこと、兄弟同士の不仲はこの分与のことより起きようから、互に用向により日ならず倍受けあつて写しを作るべきこと、また累代の雑文書であるが、これは朝廷において重要なもので、吉田の倉に安置し、いわゆる文藻堂の宝となすものであり、朝廷でことある時は奉行が定めて相尋ね来るであろうから、その時は親疎を論ぜず書拔などして貸与すべきであり、家長たる者として虫弘などは怠つてはならないことである、と記している。文筆を以って朝廷に仕える名家として、「累代雑文書」は、まさに「朝廷之重器」、自家の「宝物」としての扱いをなし、保存に入念であるべきこと、これが家嫡の重要な務めでもあることを示しているということです。

次の史料五・六は、経房の処分状によつてその遺領の大部分を得た、資経の処分状です。

史料五、勸修寺資経文書処分状案

文書事

家記

(藤原隆方)
但御記
(吉田経房)
吉御記

(藤原為隆)
永昌御記
(藤原資経)
自曆正本

諸家記 一門記在此内、

中世に於ける公家衆の家名伝襲と家伝文書・家領の継承（橋本）

槐記(藤原頼長) 宇治左府
(藤原宗忠) 中右記 日並、
山槐記(藤原忠親) 中山内府記
中記(藤原) 朝隆卿、
山亟記(藤原) 定長卿記、
糸言記
礼部記(源) 雅兼卿
随案出、次第不同記之、
九戸記(藤原) 泰憲卿記也、
新部類記等 次第

除目執筆并官藏人方以下奉行之時、雑文書等、
已上、当時雖納文庫并文倉堂廊等、可為経俊分也、
大藏卿殿(為房) 大納言殿御時文書・記録等、一向可為左中弁為経朝臣分、目錄在別、仍不注之、各為正本、不可為他人分之故也、
有佐文書不慮入手、可賜高経也、
資経・資通等成人之後、随器量、為経并経俊日記文書等、少々可計賜之状如件、
天福元年五月廿八日
(一二三三)
(勸修寺資経) 判

史料六、勸修寺資経処分状案

(前略)

一、文書

都護分(為経)
大藏卿殿(為房)・故弁殿(為隆)・大納言殿御記、正本分附先了、於雑文書者、任大納言殿契状、案置吉田倉堂、長者可為次第附属、
経俊分

予之時所書之家記評諸家記、愚記資經・雜文書等、大略附屬先了、

高經分

尚抄以下有經書籍附屬了、仕頭要者、都護且分賜文書、可有扶持、猶子之儀及多年了、

資繼分

朝隆卿記讓与了、

資通分

嘉氣抄・永昌記已上大納言殿御本中右記日並・定長卿記藤原・重方朝臣記等、讓之、頗為器量者之間、計宛了、

右、処分、更不可有違乱之状、如件、

建長二年六月二日

資經沙門在判

同三年三月十七日、於天王寺御宿、依仰加判、

為經大宰權師在判

資經は、弁官を歴任し、貞応元年(一二三二)参議に列し、安貞二年(一二二八)正三位に昇り、天福二年(一二三四)六月五十四歳で出家、建長三年(一二五二)七月十五日七十一歳で没した。史料五は出家のほぼ一年前、史料六は没するほぼ一年前に、為経・経俊・高経・資繼・資通の五子に処分したもので、前者は文書の処分状、後者は家領・家地・文書等の総処分状です。

史料五は、最初に文書事とあり、家記・諸家記・雜文書につき具体的な日記名などを掲げ、為俊分として譲与することを記し、次いで為俊分を記しているが、「目録在別」とある如く、為経分は別に詳細に記したものがあつたことを示しており、そのためこのような順序となっているのであろう。いずれにしても、文書処分を中心はこの為経・経俊にあつたことは明らかである。両人は同腹の兄弟で、とき

に為経は左中弁、二十四歳。経俊は二十歳であり、いまだ然るべき官に就いてはいなく、藏人に補されるのもこれより九年後の仁治三年(一二四二)のことです。経俊に多くの処分をしているのは、資繼・資通等が成人ののち器量に従い、為経分及び経俊分として処分された日記・文書等より少々を分与するように記しているところからいって、経俊が父資經の認める器量の仁であつたからに他ならないであらう。経俊への処分は、「家記」(歴代当主の日記等)として、隆方の「但記」、為隆の「永昌御記」、経房の「吉御記」の三日記、それに「自曆正本」を掲げる。資經自らの日記にはとくに正本の注を付し自筆原本であることを示していることからいっても、但記等の三記は写本に相違なからう。次の「諸家記」というのは、勸修寺流一門の日記を含む他家の日記で、十五記を掲げている。このうち「山亟記定長卿記」は経房の弟定長の日記、「中記朝隆記」は葉室家祖朝隆の兄朝隆の日記、「護記朝方卿記、正本」は朝隆子朝方の日記であり、しかも正本とある。また、除目執筆・弁官藏人など奉行の職務に関わつての筆物類、いわゆる雜文書等を掲げている。以上はいま「文庫・文倉堂廊等」に納めてあるが、経俊分とすべきものであるというのであり、このことはいま分蔵はせずとも処分を明確にしておく、との意であらう。為経への処分については、「大藏卿殿并大納言殿御時文書・記録等、一向可為左中弁為経朝臣分、」とし、五代前の祖為房より祖父経房代に至る文書・記録等、しかも正本を譲ることになっているのは、長子の為経を嫡子と認めていることを示すものに他ならない。歴代の正記は嫡子為経に、日記・雜文書など資經一代のもの及び多くの日記類は器量ある経俊に処分しているというところに注目しておきたい。また、高経には、たまたま入手した「有佐文書」なるものを譲与し、資繼・資通等にもいずれ器量に随ひ日記文書等を少々なりとも為経・経俊の分より譲らるべきように、としているのは、まさに文筆の家として文書・記録が重要で、欠くべからざるものであつたからに他ならないであらう。

史料六は、総処分状のうち最後の文書分で、奥に太宰権帥と連署しているのは為経であり、死期迫った父資経から求められて署判したものでしょう。これより四ヵ月後に資経は没します。処分の内容は天福元年のものと所々に異同はあるが、根幹は同様である。為経へは為房の「大府記」・為隆の「永昌記」・経房の「吉記」、いずれも正本譲与のことは、先の庶分状に見える通り。雑文書は経房処分状に任せ吉田倉堂に安置してあるもの、家嫡である為経に付属する、とする。その弟経俊は、器量の者として特別に大切にされたようで、先にも過分な処分を受けていたが、これには「予之時所書之家記」すなわち資経代に書写の家記、及び諸家記、それに資経一代の日記・雑文書の大略は譲る、とする。経俊が坊城の家（のち勸修寺家）を創立するのも、この処分による。高経へは「尚抄」以下経書、資経へは「朝隆卿記」、資通には経房書写になる「嘉氣抄」・「永昌記」のほかに、「中右記日並」・「定長卿記」・「重方朝臣記」等をそれぞれ処分している。中右記以下については、先の処分状では経俊分とされていたものと考えられる。いずれにせよ、資通は「頗為器量」により、兄の高経・資経より多くの処分を受けたのであり、万里小路の家祖となる事情が知られるのであります。

また、資経から家長者に次ぐ過分の処分を受けた、経俊の処分状は二通が遺っている。経俊は、勸修寺家の家祖として知られるが、当時は坊城と号していた。累進して文永五年（一二六八）正二位に昇り、翌八年転正して中納言、十一年治部卿を兼ね、建治二年（一二七六）十月十八日、六十三歳で没した。処分状の一通は、没するほぼ一年半前の文永十二年三月一日付、いま一つは、没する前日の日付である。前者は嫡男藏人右衛門佐俊定に対する処分状で、これは後者の中に改めて記されているので、ここでは後者のみを掲げる。

史料七、勸修寺経俊処分状案

処分

中世に於ける公家衆の家名伝襲と家伝文書・家領の継承（橋本）

一、藏人春宮大進俊定分

最勝光院領近江国湯次下庄

此内、資経入道并資通朝臣給物、一期之間也、可存其旨、

長講堂領加賀国井家庄

此内、中條讓二位中将事、

安嘉門院御領安芸国能美庄方

摂津国小林上庄経藤入道直讓俊定了、

大和国雨師社

西院

吉田家地東西屋地
加北地

（中略）

一向所譲与俊定也、但於淨蓮華院者、経顕要為家長者之人可管領之由、被（経房）載故大納言殿御契状了、仍故（為経）黄門他界之時、被示付愚臣之間、加修理、所管領也、然而就家之長者可有沙汰、於文書者、故黄門分、経藤入道通世之時、皆以成灰燼了、入道（資経）殿讓賜予之記録・雑文書以下、并予之時文書等、悉以所譲与也、

右、処分、人多領少、有志無力、随所在、省宛之、（マ、）但女房領存生之間、一向

可為彼御進止、井家庄雖被下 院宣、彼存生之間、可為御進退、若背彼御意

之子息者、不可入処分之人数、一向可為彼御計之状、如件、

建治二年十月十七日

（坊城経俊）
中納言在判
（避光平業元女）
平氏女在判
（俊定）
右衛門佐在判

署名のうち中納言が経俊で、平氏女というのはその妻の平業元（平業元）の女蓮光であり、右衛門佐とはこの処分状によって多きを得た俊定のことである。所領・家地など

処分を受けているのは都合八人(内四人は女性)。掲出分は、その内の俊定分、及び文書のことを記した部分である。

処分状の最後に、最勝光院領近江国湯次下庄以下の所領・家地等を、嫡男の蔵人右衛門佐俊定に譲与することを六項にわたり記している。とくに湯次下庄については、弟の資継・資通へ一期知行の地であるのでその旨承知すべし、と注している。また長講堂領であった加賀国井家荘は、後述の如く後白河法皇の女加陽門院の御領となり、女院の異父兄妹の平業兼の縁で経俊妻に伝領されてきたもので、中条云々とあるのは、その内中条の地は経俊女の二位中将の一期知行とするの意であろう。

次に、文書処分のところを見よう。これは一向に、すなわち文書等は全部を俊定に譲り与えるとする。但し、淨蓮華院においては、顕要の職を経て家長者となつた者が管領すべきとのことは、故大納言経房卿の譲状に明示されているところである。よつて中納言為経が他界のとき愚臣に示付されたので、修理を加えてきたところである。しかしながら、これは家長者が沙汰あるべきものであること。文書においては、故中納言為経が処分を受けた分は、その子経藤入道が遁世のとき皆以て灰燼に帰してしまつた。父資経入道が予に譲り賜つた記録・雑文書以下、ならびに予一代の文書等は、悉く譲り与えるところであるとする。そして最後に「女房領」である平氏女の所領について記し、存生の間は全てその支配をなすことで、院宣が下されてもその御存生の間は直接支配する、若しその意に背く子息は処分の人数には入れない、全てはその御計いによつてなされるものであるとする。

これらの内容について若干説明を加えておくと、経藤というのは為経の長男のことである。弘長元年(一二六二)三月以来弟の経任と官職の事を争い、同二年四月八日経任が舎兄右衛門権佐経藤を超え左衛門権佐に任ぜられると、その不平の余り同十月文書類を焼払つて出家し、如源と号した人である。恐らく母の出自

より起こつた兄弟の闘争に敗れたものであろう。因みに、経任生母は大宮院半物、経藤生母は中納言定高女であつた(『尊卑分脈』)。憤憑の捌け口が文書の焼却であつたということが、家伝文書の重要性を示して余りあるものといえよう。いづれにしても、ここで記しているのは経藤の暴挙により資経より長子為経に伝えられた文書記録類が灰燼に帰してしまつたということで、経俊への伝来分の重要性が相対的に増大していることを誇示しようとしたものであろう。また経俊妻蓮光に伝領された井家荘は、もと長講堂領で、後白河法皇皇女の宣陽門院領となり、平業兼がその預所職を得、その子業光に譲られ、更に嘉禎三年(一二三三)に譲られたものである。嘉禎三年二月八日付の宮内卿平朝臣と光蓮が連署する譲状案によつてそれが知られる。宮内卿が業光である。譲与するものとされるものが連署することは一見奇妙ではあるが、このような事例は他にも数通見えるところである。そして、蓮光は建長二年(一二五〇)十月宣陽門院庁下文により井家荘の預所職に補任されている。

経俊の処分状に「女房領」つまり蓮光所領のことまで記しているのは、蓮光存生の間の進止を安泰にするためのもので、この処分は直ちに院に奏聞され、同日を以つて龜山院宣が下され、俊定の相伝知行が許されている。しかし、蓮光が引き続き進止することになつていたことは、経俊の処分状に見える通りである。

経俊より家嫡として多大な処分を受けた俊定は、更にこれを定資に譲つた。次の史料は定資の処分状である。

史料八、勸修寺定資処分状

処分

文書家地庄園以下事

一、
前左大亟分

越前国露野保(俊妻)件地、宰相局一期後可知行之、

美作国一宮 伯耆国宇多河庄

周防国安下庄 此庄、当時牢籠申披可知行之、

一、 春宮亮經顯朝臣分

山城国伏見御領

大和国雨師社 摂津国小林庄 当時牢籠申披可知行、

加賀国井家庄 安芸国能美庄

備中国宝塔院 紀伊国近露名田

一、 和泉守経量分

近江国湯次下庄

(中略)

一、 家地事

吉田亭

左大亟分、一期後経顯可管領之、

芝山亭

経顯朝臣分

一、 家記文書雜具等事

経顯朝臣一向可管領之、兄弟等随所用、可免一見者也、

右、処分所定置如斯、面々不可有不和儀、可成水魚思、経量事、成父子之思、経顯一向可加扶持者也、抑神社仏事上分内外祈祷等、如日来不可有相違、抑経顯事、(俊定)先人御素意之上、当時被官仕次第、又愚父所見及、可継家之器也、仍如此所定置也、兼又御阿賀事、如予存生、家中管領以下、不可有相違、面々可加扶持者也、条々存此旨、子孫更不可違犯之状如件、

嘉暦三年十一月八日

(定實)
在判

前中納言定實は元徳二年(一一三〇)七月十一日に五十六歳で没するが、他界する二年前の嘉暦三年(一一三二)十一月八日に、文書・家地・莊園以下を、一男の前左大弁俊実・二男の春宮亮経顯・三男の和泉守経量および御阿賀等の女性三名の、都合七名に処分している。俊実分としては、所領は越前国路野保等の四カ所、家地としては吉田第が与えられた。所領の大半を管領することとされ、芝山第および家記・文書・雜具等の一切を譲られたのは経顯であり、俊実に与えられた吉田第にしても一代限りとされ、一期の後経顯が管領すべし、とされた。経量に与えられたのは一ヶ所のみであった。このように処分するのは、経顯は祖父俊定の見込んだものでもあるし、官位も昇進しており、また父から見ても、最も家を継ぐるに足る器量であるからである、と記されている。因みに、この段階で俊定は、すでに前参議正三位に昇り公卿に列しており、経顯は正四位下春宮亮であったから、二歳年少の経顯が家嫡とされたのは、まさにその器量の故であったのであり、これを決定する父の権限の絶対性を示すものである。そしてこの経顯は、のちに内大臣従一位にも昇る。勧修寺流の由緒ある勧修寺の号をもつば家号として用いるのも、この経顯のときからである。なお、俊実の家流が小川坊城家、隆量の家流が町家(のち絶家)である。

以上、勧修寺家に伝来した処分状について検討してきた。史料名を勧修寺誰々処分状の如く扱ってきたが、これはあくまでも家の系統を判り易くするために便宜的に称したにすぎず、当時用いられていた号ではないことをお断りしておきたい。要するに、勧修寺は、元祖内大臣高藤の追号であり、氏寺の名である勧修寺の号を初めて用いたのは坊城大藏卿為房で、その曾孫経房は吉田と号し、その孫吉田大式資経の後は、為経(号吉田)・経俊(号坊城)・資通(号吉田)等に分流し、経俊は勧修寺家の家祖となるが、経俊は坊城と号し、家名を勧修寺と号するのは室町初期、経俊の曾孫経顯の時からのことである。

経俊が勧修寺をその号に称することについては、一族間でも一悶着があった。

同族の万里小路時房の日記『建内記』応永三十五年(一四二八)三月二十三日条に、「長光卿記」に記すところとして次の如く見える。

勸修寺称号之事、経顕卿于時号坊城、于時長者申家君長隆卿事也云、可号吉田之条本意也、坊城非本意也、俊光卿号日野、依此例為長者一代之号、可称勸修寺如何、此号後奉讓中納言殿長光事者、家公御返事云、元祖内大臣殿御追号也、後生恐之不称此号、仍難申意見之趣也、如此記六分明也、一代之号而子孫各至經興卿猶称之、無謂事也、依之人以存惣領之由歟云々、

時に一族の長者であり坊城と号した経顕卿が、長光父である家君葉室長隆卿に云うには、坊城の号は本意でなく吉田を号すべきではあるが、俊光卿が日野と号した例に倣い、長者一代の号として勸修寺と号するは如何、此号は後には長光卿に譲りたい、と。これに対し、長隆返事して云う。勸修寺は元祖内大臣高藤公の御追号であり、末裔としては憚ってこの号を称しない、従って意見を申し難いといった、というのである。このように記録は明らかであり、一代の号であったものを、子孫に至り経興に至ってもなおこれを称しているのは、謂れ無いことである。これにより一般の人はこの流れを勸修寺流の惣領家のように思ってしまうことにもなるう、と記されているのです。勸修寺の号は経顕一代限りの号ということであったが、以後の家名になってしまったというわけであり、惣領家は甘露寺家であることは前にもお話しした通りです。戦国期から江戸期にかけて勸修寺家は勸修寺流一門のなかでもっと繁栄し、後奈良天皇の生母は教秀の女藤子(豊楽門院)、後陽成天皇の生母は晴右の女晴子(新上東門院)であったし、江戸期には家領も一門で最高の七百八石でありました。因みに、甘露寺家は家領二百石。このようなところから誤解を生じたのでしょうか、『諸家知譜拙記』や『雲上明鑑』などでは甘露寺家が嫡系と位置づけられているが、『譜家伝』では勸修寺家を本流としています。辞典類になると、多くが勸修寺家を惣領家としていて、『国史大辞典』でも勸修寺家が嫡流との記述はないが、元祖高藤以来の総系図が掲げられ

ているのはその扱いがなされているからに他ならないでしょう。すでに『建内記』で知られる如く、室町期に危惧されたことが起こってしまったといえましよう。

以上、九条家や勸修寺家に伝来した処分状をもとに、財産の相続というものがどのようになされたかということなどについてお話ししてきました。遺産相続の根幹となるのは、家領・家地、それに文書・記録であり、年齢の長幼・性別とは直接関わりはなく、処分者の絶対的な権限のもとに処分され、もともと眼鏡になつた者が家長者として最も重要で多くのものを譲られたということがいえます。そして、文書・記録であれば、家伝の正文類、日記の正記などは家嫡たるものに譲られるというのが一般的であったかといえます。

では、予定時間もすでに過ぎていきますので、この辺で終わりたいと存じます。長時間にわたりご清聴ありがとうございました。

付記

講演録に基づいたが、重複や言葉足らずのところが目立ち、そのためにかなりの補訂を行うことになったこと、諒とせられたい。また、原稿作成が遅れたことにより、実は最終的な読み返しは伊勢神宮の外宮斎館で行った。平成二十八年十月十五日・十六日神宮(外宮)の神嘗祭があり、小生は奉仕神職四名の一人として十四日より外宮斎館に参籠、十五日午後十時由貴夕大御饗儀、十六日午前二時由貴朝大御饗儀、午後十二時奉幣儀に奉仕し、それに同日午後六時御神楽に見参。大宮司以下の神宮の神職の方々の後尻に繋がり、神宮の五大祭のなかでも最も重儀である神嘗祭に奉仕できたことは、田舎の一神主としては光栄これに過ぎるものはない。また、斎館にて祭事の習礼のかたわら、本稿の最終的な仕上げを成しえたことは極めて有難いことであった。後の思い出にもと、かく付記するところである。

(はしもと まさのぶ・東京大学名誉教授)